

Report from the EDGE

イアン・スマイズ博士からのメッセージ

大阪にて

日本を訪問するといつも時間が足りないので選ばなくてはならない。そこで大阪では私は少しでも日本の歴史と文化に触れようと大阪城を訪問することを選んだ。しかし、そこでの思い出は日本の歴史ではなく、議論の余地はあるが日本の将来について、それもディスレクシアに関連してであった。

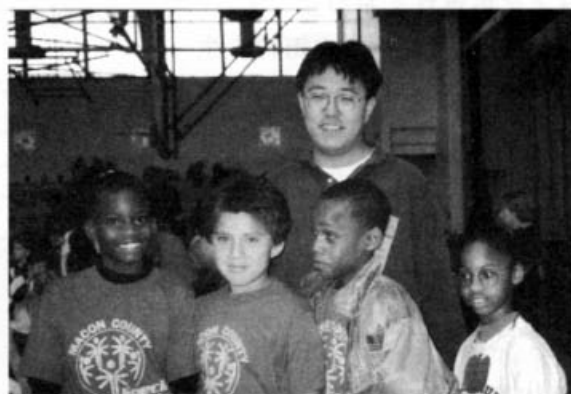
この大きな城の記録をとろうと最新の高級デジタルカメラを取り出した。ふと周りを見回すと、私の両隣に同じようにカメラを構えている人がいた。一人は使い捨てのカメラ、もうひとり学生で携帯電話で写真を撮っていた。三人とも同じ作業をしていたが、それぞれのやり方は全然違っていた。ただこれが、人はそれぞれディスレクシアの人は特にそれぞれ違っていて、それぞれの能力とニーズにあった物事に違う取り組み方をしているということだけをいうのではなくて、さらに話は続く。もう一つの特筆する点は三人ともが書いた言葉を使わないコミュニケーション手段を遣っていたことである。将来を見据えるとさらに書かれた言葉を使うことが少なくなるのではないかと思われる。

自問していただきたい。SF映画を見ると、言葉を書いている場面がどれほどあるか。目にする場面は色、ボタン、形、イメージであり主人公はそのような情報をやすやすと操れる人である。これはまさにディスレクシアの人の特徴ではないか。画像としての情報の操作はたやすくできるが書いてある言葉は難しい。これの意味するところはなんだろう。過去において、読み書きのできる人が力を持っていた。将来的にはもしかしたら画像として捕らえる能力を有している人が力を持つようになるのだろうか？ ディスレクシアが支配するようになるのだろうか？ あまりにも憶測をするのはやめるが、注目に値するのは、その学生がもうすでにテキストでメッセージを送る代わりに写真と言う映像で送っていたということだ。少なくとも彼女



にとってテキストは余分なものだった。

未来の親は子ども達から「ディスレクシアって何?」と聞かれ、年長者が「それはね 20世紀と21世紀の問題だったんだよ。一人一人強みと弱みにあわせて教えることが出来る前のね。読み書き以外の強みを持った人たちのものすごい能力を利用する前のね。」と答えることになるのだろうか?



今回のパーソナル・ストーリーは石田博彰さん。米国ジョージア州での大学生活のエピソードや、卒業後のお話を書いていただきました。 → P5

イアン・スマイズ博士来日

—グレート・ブリテン・ササカワ助成事業—

昨年9月の来日に続き、国際ディスレクシア・コンサルタントのイアン・スマイズ博士が3月9日より15日まで滞在した。多言語でのディスレクシアの発現とそのアセスメントに携わり、昨年度までは英国ディスレクシア協会の発行するハンドブックの編者でもあった。

今回の来日の目的は当NPOで培っているネットワークの構成員である様々な分野の専門家の方たちとお会いして、日本におけるディスレクシアの現状の認識と今後の課題を明確化し、その成果を今後のエッジの活動に役立てるためである。

広島大学の山田純先生、西宮のYMCAの西岡有香先生、国立精神神経健康研究所宇野彰先生、旭出学園服部由起子先生、文部科学省特別支援教育課柘植専門官、公立小学校副校長安藤寿子先生、西埼玉LD研究会の白倉先生、中嶋先生、佐々木先生と個別に各2時間以上の時間を費やして日本のディスレクシア教育の現状、日本語の読み書きの習得の特徴と困難さ(カナと漢字)、その日本語のアセスメントをどのように考えるかなどの意見交換が多く行われた。意見交換だけではなく、実際にこういう教え方が出来る、こういう教材が作れるという現実的な解決方法へのアプローチも披露された。

二回のエッジのメンバーとのワークショップを通して、イアンからは現在のエッジの問題点、また今後の展望として、プロジェクト・エッジが実際に稼働し始めてから講師として呼ばれるなら再来日することと、8歳から12歳くらいのディスレクシアの子のためのインターナショナルスクールの設立を提案された。

スマイズ氏来日スケジュール

3月10日広島大学 山田純先生

海外の文献などで普通の日本人がおかしがちな漢字の間違えなどに関する論文を数多く出され、日本語では6パーセント程度の発現率でディスレクシアがいるとのこと。現在では東広島市に校舎が移転したこともあってお子さんの相談に乗ることは少ないそうだが、学生の中に英語でのディスレクシアが多く見られるということを強調しておられた。

3月10日大阪 YMCA 西岡有香先生

西岡先生は大阪のYMCAで実際にLD/ディスレクシアのお子さんを数多く見ておられる。実際に使っているテストの読み取り方や、観察のお話しなどを伺い、見せていただいた。

3月12日旭出学園 服部由起子先生

服部先生は旭出学園で子どものアセスメントをなさっている。漢字や日本語のアセスメントに限りどのような方法で対応しているのかをご披露頂き、スマイズ氏からのそれに対する提案があった。

3月12日国立精神神経健康研究所 宇野彰先生

宇野先生が現在取り組んでいる就学時に対するアセスメントとカナの習得に関する指導法についての説明など、お互いの研究に関する意見交換をした。日本における数少ないディスレクシアの研究者である宇野先生との共通認識がひろがった。

3月13日神奈川県公立小学校 安藤寿子先生

安藤先生はクラスの中にいる軽いディスレクシアの子ども達が見過ごされている現状から、アセスメントのツールとして漢字の想起にかかる時間を計る方法を独自に使用している。現場の小学校の教師として漢字の習得がディスレクシアの子にとってどのような点で困難なのかを漢字の特徴、成り立ち、日本における言語教育の問題点などを含んでのお話しがあった。

3月15日西埼玉LD研究会 白倉先生、中嶋先生、佐々木先生

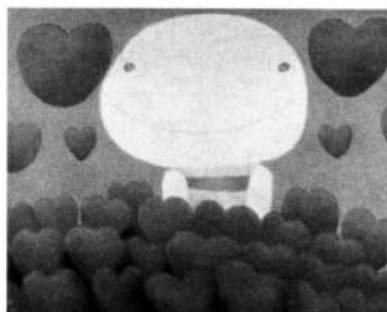
西埼玉ではLD教育士を取られた先生方が中心になってLD研究会を開催し、実際に子ども達の指導に当たられている。教育現場で困ることはLDのことを知らない教師や保護者が多く適切な教育をしようとしても中々理解を得られないことだそうだ。スマイズ氏からは、良い先生なら経験則的にわかっていることを体系付けたLearning Styleに関する本があるので是非お勧めしたい、マインドマッピングという思考をまとめる方法もあるとの紹介があった。

スマイズ氏の最後のコメントは

「日本にもまだ、LD・ディスレクシアの子どもの教育に関する法律などこそ無いが、そのことを理解して適切な指導をしている教師はたくさんいる。ただ、それぞれが独自に学校の中で対応するのに精一杯で、その情報やノウハウを共有することが少ないように思える。」というものだった。

この情報を多くの教師が共有しディスレクシアの児童に活かされるようにエッジが活動していく必要性を再認識した。

マッケンジー・ソープ絵画展を主催します(9月14日～27日)



この秋、ひとりの画家が来日します。「希望・愛・喜び」を伝えるために。

一見風変わりなこの画家の絵が、多くの国でとても人気を呼んでいます。

まんまる頭の坊やにかわいい動物たち。これらのモチーフはマッケンジー・ソープの絵にひんぱんに使われます。「希望・愛・喜び」を謳う暖かい絵の数々。無垢で愛らしいソープの作品は多くの人を魅了して止みません。彼は色彩の魔術師でもあります。鮮やかな赤、美しい青、多くの色使いが絶妙です。作品は愛らしい絵ばかりではありません。彼の過去の苦労を物語るような深みのある作品もあり、そのギャップがまた人気の秘密なのかもしれません。

ソープは英国の造船所の町ミドルズブルグに生まれました。ディスレクシアで苦勞をし、学校の試験では座ることができず、学校では先生からも迫害も受けたとのことです。

15歳の頃には唯一見つけた造船所の作業員をはじめますが、暗い船底を1日中磨く作業は長く続かず職を失います。友人からの勧めで美術学校へ挑戦する決心をしたのはそんな不幸のどん底にあった時です。彼をいじめから守ってくれた叔父の協力もあり、芸術の道を歩きはじめたのです。

成功までの道のりは長くかかりましたが、結果として数百にも及ぶ各国のギャラリーに作品を求められるようになりました。2000年にはイギリスの1700の美術業者が参加するファインアートギルドよりベストセラーアーティストとして選ばれ、その人気を不動のものとしています。

2001年、マッケンジー・ソープは「デスティニーツアー」を開始しました。子供達を支援するボランティアと一緒に活動し、自らの体験である“逆境を乗り越えた成功”を子供たちに伝えます。

過去に厭なことはたくさんあったと語るソープ。しかし今、自分はどうしてここに生きて

いるということを強く意識し、「希望は必ずあり努力すれば必ず幸せになる」という彼の思いが作品に込められています。

マッケンジー・ソープ氏は・・・

1956年

英国ノースヨークシャーのミドルズブローに生まれる。

ミドルズブロー美術大学卒業

バイアムショー美術学校(ロンドン)卒業

1995年

イギリス北部で最大規模の個展。

1996年

LAアートEXPOカタログ表紙の公式作家に選定。

エルトン・ジョン「エイズ基金」のカードデザイン。

1997年

プリンセス・アン「子供達を救え基金」、BDAのカードデザイン。

1998年

イギリス保守党首ウィリアム・ハーグのカードデザイン。

2000年

英国美術業者1700社のギルドより、ベストセラーアーティストに選出。

2001年

英国・米国でデスティニーツアーを開始。

2002年

アンドレ・アガシが主催する、障害児に教育の選択を可能にする運動に協力。

チャリティー及び寄付、芸術振興活動に協力している主な団体

- ・サンフランシスコ自殺防止協会、カナダ・モントレー・チャートウェルスクール
- ・シカゴ子供たちのための記念病院、ジャクソンヴィル・グリーンウッドスクール
- ・イギリスのNSPCC(子供の貧困を防ぐ英国国際組織)
- ・NY世界貿易センタービルテロで親を亡くした子供の奨学金制度

マッケンジー・ソープ来日絵画展



平成15年9月14日～27日

於：丸善日本橋店4階ギャラリー

(9月14日～20日)

ホテルオークラ別館ロビー

(9月20日～27日)

期間中、ディスレクシアなどの軽度発達性障害の理解を深めるためのパネル展示を行なう他、チャリティパーティ(9月19日)などを予定しています。

お問い合わせは、EDGE事務局まで・・・



NICE TO MEET YOU

「雨ニモアテズ」 根本明彦

雨ニモアテズ
風ニモアテズ
雪ニモ夏ノ暑サニモアテズ
ブヨブヨノ体ニタクサン着コミ
意欲モナク体力モナク
イツモブツブツ不満ライツテイル
毎日塾ニ追ワレテレビニ吸イツイテ遊バズ
朝アクビヲシ
集会ガアレバ貧血ヲオコシ
アラユルコトヲ自分ノタメダケ考エテ
カエリミズ
作業ハグズグズ注意散漫スグニ飽キ
ソシテスグ忘れ
リップナ家ノ自分ノ部屋ニ閉ジコモツテイテ
東ニ病人アレバ医者ガ悪イトイイ
西ニツカレタ母アレバ養老院ニ行ケトイイ
南ニ死にソウナ人アレバ寿命トイイ
北に喧嘩ヤ訴訟ガアレバ
ナガメテカカワラズ
ヒデリノトキハ冷房ヲツケ
ミンナニ勉強勉強トイワレ
叱ラレモセズ
コワイモノモシラズ
コンナ現代ッコニダレガシタ
(産経新聞 H12.10.31)

思わず笑ってしまった。最近のガキども(おっと、失礼!)の日常がスルドク表現されているではないか。確かに学校では雨が降るだけで急に欠席が多くなるし遅刻も増える。ちょっと暑いと「気持ちが悪い」と言い、冷房を入れると「お腹が痛い」という。コンナ現代ッコニ誰ガシタ?

この3月、元気に卒業して行った3年D組の諸君は、それぞれ自分が選んだステージでの新たな生活が始まっているのだろう。3年D組は定期考査の平均点はいつもビリ。卒業時の成績くらいはガツンとトップで!と意気込んでみたもののやっぱりビリだった。特に英語と数学は致命的である。けっこう頑張っているように見えるのだがダメってことはどうやらセンスの問題のようだ。それでいて体育祭なんかでは奇跡の総合優勝!なんてやらかしてくれるので実に楽しかった。(でも、少し悲しくもあるぞ。)

ある日、大学進学を希望しているAは学校案内や願書などの資料請求をしたいと言って、請求用のハガキを書いて持ってきた。「こういうときは ○○大学 入試係行」という宛先の「行」を消して「御中」って書

くんだよ」と指示をした。彼はニッコリ笑って軽快に「わかりました!」と教室にもどって再



び現れた。そのハガキの宛先には「行」が二本線で消されて「Want You」と書いてあった。ドヒャー!「ウォンチュー」じゃねーだろ!「おんちゅう」じゃ!「御中」!・・・ヒャー!情けない!しかし、考えてみれば進路を何とかしてゲットしたい彼らにしてみればまさしく「Want You」である。そんな切実で純粋な意味が込められていたのならばギューっと抱きしめてほっぺにチューをしてあげるところであるが、たぶん「御中」って言葉を知らなかっただけのことであろう。

就職希望は履歴書を1枚書くのに3時間もかかり、推薦入試をねらう進学希望者はトンチンカンな小論文を書いてくる。努力をせずに希望だけを言い、他人の意見を聞かずに自分の主張だけはする。物事がうまくいかなかったり思い通りにいかないと他人のせいにしたたりトンチンカンな言い訳をする。パーロー!世の中ナメとんのか!と声を張り上げたくなる状況が何度もあった。

そうかと思うと、コココーラのオマケについていたサッカー選手のフィギアコレクションのなかの「小野伸二」が出てこない!と言うと、その日のうちに「当たったから明日持ってくる!」とメールが入る。彼氏と別れた話をしにきて涙を流すかと思えばニヤニヤしながら彼女ゲットの大作戦をたてにくる。はたまた、うちのおチビさんにカブトムシやクワガタを採ってきてくれたりもする。また、何を思ったのか思いっきり自転車をこいで追い越した私の車を追いかけてきたり、卒業した今でも「今日は入学式デス。行ってきます!」「どもお。お元気ですか?俺は今いち社会人として頑張ってます!!あの遅刻人間の俺が今じゃ7時の出社に間に合うようにキッチリ起きてるんですよ。スゴイ?」「配属が決まりました。絶対に来てね!」などと毎日メールがはいる。見た目や一部のオバカサンの行動で「最近の高校生は・・・」と言われてしまう昨今であるが捨てたもんじゃありません。少なくとも北総の小さな学校ではとてもおいしくて素敵なおキャラが育っております。

「雨ニモアテズ」という詩はご存知の通り、宮沢賢治の

「雨ニモ負ケズ」がベースになっている。彼が生きた時代とは価値観が違っているとは思いますが、オリジナルは現代を生きる我々に欠けてしまったものを教えてくれる。賢治のような「雨にも負けず、風にも負けず、さりげなく、地道な生き方」も素敵だと思いませんか。我が愛すべき3年D組の諸君の前途を祈るとともに、それなりの年を取ると妙に考えさせられる詩でもあります。

4月1日から「エッジ」で勉強させていただき、目からウロコが落ちるといえるのはこういうことだということに出くわす場面が何度もありました。「エッジ」の

スタッフの皆さんの溢れんばかりの熱いエネルギーにも圧倒されながら、勉強させていただくだけでなく何かお役に立つことができればと思っています。よろしくお願いいたします。

根本先生は、2003年4月1日より7月31日まで千葉県八街市の私立千葉黎明高校より、NPO法人エッジにて研修中。

● ● パーソナル・ストーリー no.3 石田博彰さん

～大学生活～

1993年、米国ジョージア州…ボクは条件付で入学しました。生徒数は約3000人。州都のアトランタへは車で3時間、近くのスーパーまで徒歩1時間、夏の気温は40度、とにかく辺鄙な場所でした。南部特有の差別もあったので偏屈だったところとも記憶しています。大学入学間もない頃、したかった勉強は「二ヶ国語としての英語教授法(TESOL)」でした。それが専門分野の必修クラスで取った「Special Education(特殊・特別教育)の概論」がキッカケとなり、ボクは英語教育からLD教育へ進むことになりました。講義初日、今でも頭から離れない言葉をいくつかここで紹介します。

- ① Special Educationの先生がしなくてはいけない真の仕事とは、Special Educationに送られてくる生徒を元に戻すこと。つまり、自分の仕事を自分で無くすことである。
- ② Disabilityの略で使われている「D」は誤略。「D」の真意は「Difference」である。
- ③ LDの前に他の「D」を知ること。その違いが分かったときにLDが何か分かる。
- ④ テストやアセスメントにある数字に惑わされるな。その子の個性とニーズを見よ。
- ⑤ Disability(障害)はAbility(能力)の1種であることを忘れるな。

この授業から卒業するまでの2年間は、非常に内容の濃い、そして他ではできない学習と経験を積みさせてもらいました。専門課程で印象的だったことは、LDの前に知らなければならぬことがたくさんあるということです。LD以外のDisabilityとGiftedの教育。ADDやADHD。それ以外にも、歴史、法令、裁判、環境、人種、ダイエット、テスト、レッスンプラン、マネジメント、アセスメント、

IEP、メディア活用、教育と学習の違い、教育心理など、細かく挙げていくとこのスペースでは全然足りないくらいの内容でした。

実務学習の2年目は、インターンシップに始まり、9月の短期研修、最後に約3ヶ月の教育実習がありました。インターンシップとは、午前中を中学校で研修生として過ごし、午後を大学で講義を受けるコースです。別名、缶詰状態を指すことから「ブロック」と呼ばれていました。また、月曜から金曜まで学校と大学を往復する以外にも、ADHDを持つ小学生のプライベート指導、留学生団体代表、アルバイトも兼務していたので、他の学生とはまた一味も二味も違う経験を積むことができました。9月の短期研修では、近くの小学校で新学期の準備を手伝いました。そして、最後に教育実習が始まったわけですが、大学へ行ったのは学期の最初と最後だけ。あとは小学校に通い詰めました。最初のうちはアシスタント的な役割と雑務が中心。日が経つにつれ担当する生徒・レッスン・IEPも増え、学期が終わる頃には、教室の先生がアシスタントで教育実習生のボクが全てを仕切っていました。あと、ちょうどその頃、アメリカ特殊教育児童協会(SCEC)大学支部長の活動やジョージア州代表で国際会議出席もあり、学校環境の外側も垣間見ることが出来ました。

～卒業、就職、そして帰国～

卒業後は帰国…と考えていたのですが、自身にあるLDの「？」をもっと追求したかったので、現地で就職することにしました。場所は、アトランタ近郊にあるリルバーン中学校(Lilburn Middle School)。生徒数は約2,000人。障害によるサポートサービスを受けている生徒は全体の15%。学習障害、知的障害、情緒障害の特殊学級とリソースルームの教室がありました。ボクがリソースルームの教師として受け持った生徒は6年生と7年生。知的な遅

NPO・EDGE 第二回 総会 ご報告

2月22日(土) NPO・EDGE 第二回総会が、みなとNPOハウス 4階大会議室において行われました。総会の次第ならびに、決議事項のご報告を致します。

議題

- 平成14年度活動報告
- 平成14年度収支報告
- 平成15年度事業計画
- 平成15年度収支予算
- 役員(会長・副会長・理事・監事)選任
- 定款変更
 - 会員を「正会員」及び「賛助会員」とする
 - ・正会員(議決権あり)
 - ・賛助会員(議決権なし)

2002年度活動報告

2002年度は事実上エッジとして本格的に活動するスタートの年となりました。

エッジ発足までに数年温めてきたディスレクシアを支援するためのさまざまなアイデアを具体的に進めていくためには誰にでも分かりやすいビジョンを持って足元を固めていくことが重要な課題となります。このことから、私たちはエッジのビジョンならびにディスレクシアについての広報・啓蒙と、具体的にディスレクシアを判定するにはどのような方法を用いていくべきかという二つの命題に取り組んできました。

1. 広報・啓蒙活動

- ・メールマガジン、ニュースレターの発行
- ・研究会、講演会、シンポジウム等の開催
- ・他団体主催講演会などへの参加

2. 支援事業

- ・英国研修

大和日英基金の助成事業で、英国研修を実現。7名の参加者が集まり6日間に亘りロンドンにある Hornsby Dyslexia Centreでディスレクシアのアセスメントを中心とする研修が行われた。

- ・イアン・スマイズ博士の招聘

グレイト・ブリテン・ササカワの助成金を頂き2002年9月15日から25日まで来日。LD学会での講師、専門家との話し合い、小中学校への訪問などを実施。

- ・プロジェクト・エッジ

「知的障害が無いにもかかわらず、教師が基礎的な学習のレベル(読み書き、算数と英語)で困っている児童を支援する」ための教育専門家集団を作ることを目的として、アセッサー・インストラクターの資格を設定しその育成を図る、スクリーニングテスト・アセスメントならびに教育クリニックシステムの構築を図る。インストラクターのための教育支援情報の収集と開発を行う。

上記の目的のためにプロジェクトの骨子を作成した。

2部の懇親会では、軽食をとりながらこれまでのEDGEの活動記録や今後の事業計画などを映像で観ていただきました。

会員の方だけでなく、一般の方々も参加して頂き、親睦・交流の場になりました。

とても、和やかな雰囲気の中、総会、懇親会と盛会に終了致しました。

2003年度事業計画

2003年度は前年度取り組んだ課題を更に固めて進める年とします。広報啓蒙活動を広めていくこと、日本語での判定を教育的な支援をどのように進めるかが命題になります。

1. 広報・啓蒙活動

- ・メールマガジン、ニュースレターの発行
- ・講演会、シンポジウムなどの開催
- ・イベント：マッケンジー・ソープの絵画展(9月13日から27日)
- ・出版企画
- ・関連国内、国外組織団体との交流

2. 支援事業

- ・アセスメント手法の開発
- ・教材及びサポートプログラムの開発
- ・第2回英国研修
- ・東京個別指導学院(TKG)との事業提携
- ・イアン・スマイズ博士の招聘 3月9日より15日

第2期決算(02.1~02.12) NPO EDGE

収入の部		支出の部	
科目	金額(千円)	科目	金額(千円)
会費収入	511	講演会・研修会支出	2,655
入会金収入	220	事業支出・書籍等原価	375
寄付金収入	7,253	家賃	713
講演会収入	332	光熱費・通信費	422
書籍販売収入	411	給与・交通費	910
研修会収入	900	事務用品・消耗品・図書費	600
助成金収入	54	宣伝費(Web Maint)	
その他経費	3,727	リース料	1,207
		その他経費	620
		固定資産取得支出	1,169
収入計	13,508	支出計	8,671

第3期収支予算(03.1~03.12) NPO EDGE

収入の部		支出の部	
科目	金額(千円)	科目	金額(千円)
会費収入	1,200	講演会・研修会支出	5,920
入会金収入	500	事業支出・書籍等原価	2,480
寄付金収入	1,000	家賃・コミュニティハウス負担金	
講演会収入	600		900
書籍販売収入	400	光熱費・通信費	1,080
研修会収入	1,100	給与・交通費	3,930
助成金収入	5,400	事務用品・消耗品・図書費	600
事業収入	4,400	宣伝費(Web Maint)	
		リース料	924
		その他経費	360
		借入金・未払い返済	2,645
収入計	14,600	支出計	18,839

記事の案内

アエラ合併増大号(02,12,30～03,1,6 No.1)

ディスレクシア「読み書き困難」あのトム・クルーズも

「困っている子どもたちを見過ごせない。」「現場からはこんな悲鳴が聞こえてくる。」いつもそう叫びながら取材をし、書き続ける一人のライターがいる。ノンフィクションライターの品川裕香さんが、その人、アエラのディスレクシアの著者である。彼女の特徴は現場主義。とにかくライターは足で書くといわれるように、ひたすら現場へ出かけて、丹念に取材をする。常に子どもたちの目線に立って、「これでいいの？大人として、平気でいられるの？同じことされても良いってこと？」と、熱っぽく訴える。

現場を忠実に見据え、あくまでも事実を報告するのが彼女の役目。「その報告をどう受け止め、いかに行動するか、後は読者次第。」という品川さんのライターとしてのスタンスは、今回もディスレクシアの青年と少女を取り上げ、比較することでディスレクシアの複雑な問題点を説明し、彼らの困難さを伝えている。まず、「ディスレクシア」という文字を一回で正しく読めない人々には必見の、ディスレクシア入門編。著名な専門家たちの解説も分かりやすく表現され、ディスレクシアの症状を持つ二人の少年少女時代を取り上げながら、ディスレクシアの難解さと特徴をやさしく4ページにわたりまとめている。どこかでディスレクシアの言葉を耳にしたら、あるいは目にしたら、これを虎の巻にもう一度読むことをお奨め。お求めになれなかった方のために、NPO EDGEのHPにただいま掲載中。
<http://www.npo-edge.jp> を是非ご覧ください。

論座2003年4月号(朝日新聞社)

英国に学ぼうLD児支援

山口栄一玉川大学教育方法学教授

社会全体でディスレクシアを支援するLD(学習障害)のうち、とりわけディスレクシア(読み書きを学ぶことに問題がある人)への支援に社会全体として取り組んでいる英国の現状を報告する。

昨年8月にエッジが主催した英国研修にも参加した山口先生がご自身のディスレクシアとの出会いから現在の英国における支援と啓蒙活動について生き活きと的確に描いている。ディスレクシアへの対応が昔から取り組まれている英国の理解が進んでいるだけではなく、法的にも整備され、学校や地域、雇用の現場などの状況を説明した上で日本のこれから求められるシステムにも言及している。

(藤堂)

図書館雑誌2003 4月号 掲載

アクセシビリティ・・・読み書き困難と図書館

ディスレクシアにとって、「図書館」とはどんな場所でしょうか?「遠い国」のようなところ、とでも言えるでしょうか・・・。彼らは、今のままではほとんど「図書館」に足を運ぶことはない・・・と思われます。

彼らが十分な理解力と、旺盛な好奇心を持っていたとしても、です。

EDGE会長藤堂が、図書館雑誌4月号の特集*すべての人が知ること、楽しむことをめざして*に、ディスレクシアサポート団体の立場から寄稿しています。「図書館」という公的な場所ですら、最近まで「あらゆる人に開かれているのか」という問いかけが、案外忘れられていました。そんな中にも、この特集が組まれたことに、時代の変化を感じます。ディスレクシアへの対応は、さらに視覚障害、高齢者への対応へとその範囲を広げることができます。

皆様、図書館へお立ち寄りの際は、ぜひお読み下さい。

2003年度(平成15年1月1日～4月10日)

NPO/EDGE

活動報告

- 1月22日(水) Dr.ニック・エリスを囲む会
- 29日(木) 東京個別指導学院との事業協力に関する契約締結
- 1月21日(日) Dr.ニック・エリス、EDGEにてワークショップ
- 2月4日(火) 文部科学省訪問(藤堂、長田、堀口)
- 16日(日) 東京個別指導学院室長対象研修会(10:00～17:00)
- 3月3日(月) 港区NPOパネル展(7日まで)
- 9日(日) イアン・スマイズ氏来日
- 15日(土) 大田区教委講演(藤堂、高多)
- 29日(土) 筑波シンポジウム(藤堂講演)
- 4月1日(火) 根本さん[黎明学園教師]EDGEで研修開始(7月末までの予定)
- 7日(月) イアン・スマイズ氏来日総括(コミュニティハウス 18:00～21:30)

今後の予定

- 4月24日(木) オーストリア医師夫妻来訪(LD,ADHD研究)
- 5月24日(土) LD入門コース開催
- 6月6日(金) 東京個別指導学園 新人研修一日コース
- 8月後半 第二回 英国研修(国際交流基金)

Report from the EDGE - 第3号 -

2003年4月23日発行

発行者 NPO法人EDGE

発行責任者 藤堂栄子 東京都港区六本木4-7-14

みなとNPOハウス4F

Tel: 03-5413-3356 Fax: 03-5413-3358

編集 NPO法人EDGE事務局

印刷 株式会社オペラ

<http://www.npo-edge.jp>

e-mail: info@npo-edge.jp